

小学生の生活構造の国際比較 (その1)

明星大学 福永安祥

1.

1 比較、すなわち、複数の事象間(なんらかの意味で類似性を持ち、同一の類に属する)における同一性の確定(事象間における類似と差異の承認)についてこの研究作業は、社会学あるいは教育社会学にとって最も基本的な研究方法とみることが出来る。そして、社会学の命名者A.コントは、社会学の研究手法として、観察法、実験法、比較法および歴史法をあげている。これは、この4者のうちで、社会学特有の研究手法は歴史法であるとしているが、これは、当時の科学研究のもつ時代的制約によるものとみることが出来る。今日、観察法は、社会調査における観察と非観察の観察は、ともに重要な研究方法であることが認識されているし、実験法については、小集団実験から実験社会学の成立をもたうとしており、比較法についても、比較社会学、さらに、比較教育社会学の成立が主張されはじめという状況である。

2. 比較研究は、一方において、西洋の啓蒙思想以来の普遍主義的傾向に対するものであり、他方において、閉鎖的な個別研究(独逸化した日本文化論など)に対するものであって、特定の社会事象の一般化の研究あるいは個別化の研究に対して、その事象の、より具体的なレベルにおける相対的位置づけを求めようとする。したがって、複数の事象間の差異と類似性について注目がある。

従来からの比較研究の単位は、しばしば、国家あるいは民族集団におかっている。したがって、比較研究は、一国内における地域差の発見に重きを置く内国的研究も少なくないが、通常、一国内の社会事象と外国における同様の社会

事象の対比として成立してきていて、それは、1つの外国研究であり、また、それを通して、より広い自己認識を達成するための手段とみることが出来る。したがって、比較研究は、同時比較とその基本的特徴とすべきものを考へよう。比較研究の方法のアプローチとして、共時的レベルの場合と、通時的レベルの場合とが指摘される。前者においては、空間的変化の様相が明らかにされる。

3 教育社会学における研究の動向を概観してみよう。戦後、当初、文化人類学の影響の下に、パーソナリティー研究が主題としてとり上げられて、文化とパーソナリティー形成の基軸とする研究が進められた。やがて昭和40年代後半から、「家族と教育」が注目集めて、そこから、家庭教育、しつけ、家庭教育の機能などの問題が登場し、家族における社会化研究に重点が移った。

やがて、昭和40年代から、社会化概念が浸けられて、パーソナリティー研究に代って、社会化研究が新に注目集められることになり、とくに「パーソニズ」の理論の影響が大きい。家族集団の社会化研究とともに、やがて学校における社会化研究の重要性が認識されはじめた。これは、学校が、社会形成のための人材養成という近代社会に与える「戦略的地位」が重視されるようになってきたことによるものと考へられる。子どもは、学校によって、価値意識を内面化し、「社会に適応」し、あるいは、「適応させられる」といふ。今日では、家族とともに、学校が、社会化によって、最も重要な役割を果しつゝ、あるものとみることが出来る。

2.

1. 本研究は、「現代都市における社会化の国際比較」研究の一端をなすもので、(1)自由主義社会としての日本(東京)、(2)儒教主義社会としての台湾、(3)複合社会としてのシンガポール、(4)イスラム主義の社会としてのインドネシアをいづれ研究対象地域として選定し、各地域の大都市の見聞と家族の調査を通じて、東アジアと東南アジアに向けての人間理解の深化を試みようとするものである。

2. 国際比較の基準として、(1)義務教育の充実として、小学校、(2)最終学齢児童として、6年生あるいは相当学年、(3)生活・学習・環境の3側面を包摂する生活構造、(4)教育理念・学習指導基準・教科書を含めて、教育方針、(5)いづれかの近代化の地域の実現としての都市、(6)文化系(東アジア文化系と東南アジア文化系、民族的・伝統的文化と現代文化)とをとりあげる。

3. 昭和53年度の大会においては、日本の事例として、東京都香根市(昭和51年および52年調査を実施)、台湾の事例として、台湾の中部の大都市台中市と台南市(昭和53年2月調査を実施)とをとりあげて、調査の成果の分析を進めることにある。

4. 国際比較へのアプローチとしては、現地語表現による質的調査を中心とし、さらに面接、文献・資料の分析をも実施している。

3

1. 昭和48・49年の2年間におよび八王子市調査(小著「現代都市の放光」)に引き続き、昭和51年より青梅市の調査を実施している。したがって八王子・青梅地区の調査と、台中(人口55万5990人-1976年7月)・台南(53万739人-同年12月)地区の調査の比較をめぐらしている。台中市では、市立小学校37校のうち中心地区の4校64年402人を調査対象者としている。台南市では、繁華街の小学生1校64年112人を対象者としている。

2. 家族関係について、八王子・青梅地区は4人家族のしめど比率が最も高く、5人家族・3人家族がこれにつぐ。台中においては、6人家族のしめど比率が最も高く、5人家族・7人家族がこれにつぐ。却て地域では小家族化の傾向が顕著で、台南の事例では、4人家族が最も高い親子関係の強化も指摘される。

3. 日本は、明治40年にわたる高度経済成長を果し、台湾も、農業社会から工業社会へ急速に移行しつつある。また、日本、台湾ともに、東アジア文化系(漢文化圏)に属するといふ共通性も示している。

(1)香根と台中・台南の小学生64年にみられる類似点として、

①テレビの娯楽の拡大、台湾のテレビ普及(4人当り175台)とともに、長めの同視が著しい。香根市では3時間以上(55.8%)、台中では2時間程度で、いづれも、マンガ・ドーナツ=歌番組=テレビ映画に集中している。

②家族進学率の高き、台湾の小学校卒業生の進学率91%、香根では、高校へ行く(86.3%)、大学へ行く(26.9%)、台中では、高校へ行く(85%)、大学へ行く(47%)であり

③学科の分岐、香根・台中とも、体育・国語・工作の選択が多く、数学・音楽のせり合いもみられる。④遊び仲間の大さき、3人と5人。

(2)香根と台中・台南の小学生64年にみられる差異点として、①学習の側の親への依存度、

②生活時間、香根では朝・夜とも遅い。台中では、早起(6時半まで)、早寝(10時まで)型のものが多数を占める。

③手伝い、香根の小生(おつかい、おしごと、金銭のたすけ)の手伝いが少なく、おつかい、おしごと、金銭のたすけ、掃除、金銭のたすけ、洗濯)の小生の家事手伝いは多い。

④しつけ、しごつたり、注意するもの(母父-兄弟)は同じであるが、しごつたりする方に差異がある。